再び「味噌汁・ご飯」授業

~学力について~

「味噌汁・ご飯」授業の算数編を提起した。

この中で多くの先生たちが戸惑うのは、学力=点数だとした提起である。

こんなことを正面から主張したことは今までなかったはずである。

タブ一視されてきたことでもある。



「味噌汁・ご飯」授業は、まず1時間を完結する授業にすることが原点になる。

本時の目標がある。

それを達成するために組み立てる。

その1時間で達成することは、子供たちにとっては1時間分の「学力」を身に付けるということになる。

1つの単元が終わったら、1時間ごとに身に付けた学力がきちんと身に付いているかどうかをテストをする。

そのテストの結果(点数)が「学力」になる。

私たちは、このように「日常授業」の「学力」を位置づけている。



こういうことで「学力」が形成され、そのためには毎日の「授業」の積み重ねが必要であるという考え方。

言われてみれば当たり前なのだが、このことが、学校現場では、実に曖昧であった。

「学力」というのは、何か特別な考え方をしなければ位置づけられないのだと、私たちは思い 込んでいたところがある。

確かに「学力」についてはさまざまな本が出されていて、ネットで探せばさまざまな学力論が 展開されている。

「学力」というのは、何かむずかしいもので、現場にいる私たちには縁遠いものだという認識である。

だから、「これから本校では学力向上の取り組みをやる」という研究課題が設定されたら、まず最初に「学力」の定義をしなければならないという発想になる。

学力論の勉強会である。

まずさまざまな学力の定義を勉強して、それで学力について考えていこうというわけである。

 \star

私たちが毎日やっている授業は、子供たちに学力を身に付けることをやっているのである。

5年生の単元で「小数のわり算を考えよう」の3時間目で「小数÷小数の計算の仕方について 理解する」という本時目標で1時間の授業をする。

この時間で「小数・小数の計算の仕方」を子供たちに身に付けさせる。

これがこの時間での「学力」になる。

そして、この単元で5年生の「小数のわり算」の学力を身に付けさせるのである。

この学力が身に付いているかどうかが問われるのである。

私たちは、ここから、この「事実」から出発すべきだったのである。

\star

この学力(すなわち「日常授業」で身に付ける学力)が、すべての学力の基盤である。

しかし、この学力だけで「他が要求する学力」(全国学力テストや標準学力テストなど)に対応できるかというと、そうはいかない。

「日常授業」で身に付けた学力(日頃のテストは良くできる子供)が、そのまま全国学力テスト や標準学力テストには通じない。

それは、問題が違うし、答え方も違う。

教科書での問題で身に付けた学力では、対応できない問題がある。

上位層の子供は、どのテストでも対応できる力を身に付けているが、中位層や低位層の子供たちは、そうはいかない。

これは教室では当たり前に目にする光景。

上位層の子供は、学習塾や通信講座などでさまざまな問題に当たってきていて、それができる学力を身に付けているからである。

4

私は、現役の頃、「基礎的な学力を身に付ければ、応用問題にも対応できる力がつく」という 考え方を持っていた。

この考え方は、ピアジェが提起したものらしい。

でも、これは、今でも多くの教師たちのものでもある。

これで私も対応していた。

しかし、まったく対応できなかった。

日頃のテストは、平均90点以上の点数を上げているのに、全国学力テストや標準学力テストではガクンと落ちる。

そんな結果を見てきた。

考え方が間違っていたのである。

「ほんとうの学力」というのはない。

そんな学力があるのだと、ずっと思い続けてきた。

勘違いであった。

私たちが算数本で提起したのは、「日常授業」で身に付ける学力である。 これが子供たちの基盤になることは間違いない。

しかし、これが他のテストでの学力として通用するかというとそうはいかない。 全国学力テストは、要求しているテストの内容を分析しなければならない。 標準学力テストもまた、そのテストが要求している内容を分析しなければならない。 そうしなければ、目指すべき学力を上げることはできない。

これは、認知心理学が明らかにしてきたこと。

くわしく言えば、文脈依存性や領域固有性という考え方によって明らかにされている。 もし現役の頃、この考え方を知っていれば、私のクラスの子供たちはもっと良い成績になった ことは間違いない。断言することができる。

そういうことなのである。

2017年9月29日(金)

再び「味噌汁・ご飯」授業(2)

~「ごちそう授業」について~

「ごちそう授業」については何度も書いてきた。

「味噌汁・ご飯」授業と、対比的に使ってきたネーミングである。

「ごちそう授業」とは、多くの時間をかけて教材研究をし、さまざまな準備をして、精一杯の授業を展開するもの。

今まで強調してきたのは、これまでの日本の授業研究は、「ごちそう授業」追究だったということ。

それは、各学校現場では、研究授業として具現化されてきた歴史がある、と。

誤解を受けやすいのだが、私は、その「ごちそう授業」を否定してきたことは一度もない。

むしろ年に1,2度は挑戦した方がいいと言ってきた。

その挑戦で学ぶことは数多い。

ただし、その「ごちそう授業」の追究の中で必ずなされなければならないことがある。

それは、今日も6時間行い、明日も6時間を行う「日常授業」に下ろしてくる原理・原則をつかんでこなければならないことである。

大切なのは、ここ。

「ごちそう授業」の追究に、日常性を繰り込んでこられなければ「砂上の楼閣」にしか過ぎない。

\star

だから、今まで否定してきたのは、今だもってその「ごちそう授業」の追究だけをしていることになる。

公開の授業研究会などは、いまだにそれである。

いわゆる「ごちそう授業」主義に陥っている。

「ごちそう授業」の感覚が染みついてしまっているからである。

否定してきたのは、「ごちそう授業」主義に陥ることである。

この主義とは、提起される授業が日常授業にはとても実践できないシロモノであることだ。

この主義に陥っている現象が2つほどある。

1つは、研究授業主義とでも言った方がいい現象。

研究授業をやっておけば、それでこと足れりとする。

研究授業と日頃の授業(「日常授業」)とは、ほとんど関係なく過ごしていく授業研究である。 「あれはあれ、これはこれ」と区別して、研究授業さえやっておけば済まされる。

このような現象を作り上げている。

追究しても研究成果はほとんど達成できないような過大な研究テーマを設定し、年中行事化 している。

2つ目は、「日常授業」を粗末にする現象。

1つ目の現象の結果であるが、研究授業さえやっておけばいいという考えは、日頃の授業を実にイイカゲンに済ませていく現象を生みだした。

多くの教師たちの「日常授業」は、ほとんど何の準備をしないままに済まされる「ぶっつけ本番」授業になっている。

そうせざるを得ない忙しさを抱え込んでいるとも言える。

2017年9月30日(土)

再び「味噌汁・ご飯」授業(3)

~崖から転げ落ちている~

現在の学校現場を見舞っている緊急事態を、例えを使って言えば、以下のようになる。

* * *

多くの教師たちが、崖から転げ落ちていて、どう着地すればいいかと不安と心配に苛まれている。

そんなときに、相変わらず崖から落ちないようにするにはどういう柵を設ければいいかとか、 落ちない予防策はどうすればいいかなどの議論をしている。

* * *

多くの教師たちは、崖から転げ落ちているのだ。

だから、態勢を整えて、うまく着地できるようにしなければならない。緊急事態なのである。

そんなときに、まったくトンチンカンな対応をしている。

●たとえば、初任者指導の先生が初任者を指導している場面。

「もっと教材研究を数多くして授業を作っていくべきだ」

「あなたの授業はつまんない。もっと楽しい授業に変えなければ、子供たちは授業に乗ってこないよ!」

「教科書を教えるような授業ではなくて、もっと教材を工夫しておもしろい授業をつくらなきゃあ!」

.....

学級で一部のやんちゃな子供に四苦八苦して苦労しているときにこんな指導をする。まともな 授業にもなっていないのにである。

●たとえば、その学校の数クラスが学級崩壊に陥って騒乱状態になっているのに、研究授業で「言語活動の充実を目指して」というようなテーマを設けて取り組んでいる。

もちろん、実際は研究授業をやっている場合でないことは、明らかである。だから、研究は空 回りする。

こういうトンチンカンな実例は数限りなくある。

 \star

多くの先生たちは、崖から転げ落ちている。

もう転げ落ちているのに、相変わらず崖から転げ落ちないようにするにはどうするかとか、どのように柵を設ければいいかとか、そんな論議をしている。

その証拠に、相変わらず「ごちそう授業」の提案をしている。

その「ごちそう授業」の提案が、崖から転げ落ちている数多くの先生たちに届くと思っているのだろうか。

これから新学習指導要領への対応が各学校で始まる。

アクティブ・ラーニング(名前はなくなったが)への対応が始まっていく(もうすでに始まっている)。

学級崩壊を起こしている先生たち、かろうじて学級をつないでいる先生たち、…。そんなクラスに、ALの授業が成立するはずはない。

ますます荒れを増幅するだけである。

学校現場は大きな転換点を迎えている。 この認識ができるかどうか。そこにかかっている。

2017年10月2日(月)

再び「味噌汁・ご飯」授業(4)

~緊急事態なのだ~

ここ5年間で1000人近くの先生たちの「日常授業」を見てきた。

現役の頃には想像もできないぐらいの状況であった。

現役の頃は、ほとんど研究授業しか見ていなかったのである。

研究授業と「日常授業」は明らかに違う。

考えてみれば当たり前のことだが、その違いにびっくりする。

参観した先生たちの7割から8割は、主として3つの授業をしていた。

授業の8, 9割をずっとしゃべり通していく「おしゃべり授業」、インプットの部分に時間をかけて、アウトプット部分がイイカゲンになる「学力定着不足授業」、授業のほとんどを挙手発言で済ませ、傍観者が多数出てくる「挙手発言型授業」。

ほとんど教材研究をしないで、そのまま指導書を斜め読みして行う「ぶっつけ本番」授業になるので、どうしても以上の3つの授業になっていく。

同情すべきことは多々ある。

それほどまでに忙しさを抱え込んでいるのである。

学校の仕事の最後に、やっと教室の仕事になる。

授業のことは最後の最後である。

\star

多くの先生たちが崖から転げ落ちている。

まともな「学級づくり」をしないで、授業もイイカゲンになるなら、それは必然的にそうなる。

必要なのは、「ごちそう授業」をどのように作っていくかではないはずである。

そんなことは現実的にできない。

今できることは、自宅と教室とを往復しながら(限られた時間しかないのである)、それでも何とかして教室を成立させ、子供たちを授業に集中させたいと悪戦苦闘している先生たちに、届くメッセージを提起することではないか。

私たちは、そのように考え続けている。



まず、「学級づくり」ですよ。これが学級の土台に据え付けられれば、学級は何とか軌道に乗っていけますよ。

そこで「学級づくり3原則」を提起した。

絞りに絞り、もうこれ以上絞れないという形で提起したものである。

初任者が実践してみて、見事なクラスを作り上げた。

これでいけると自信をもった。

授業は「味噌汁・ご飯」授業ですよ。

短時間で授業準備をし(もう教材研究とは言わない)、子供たちを集中させていく授業を作りましょう。

基礎的な学力もしっかり身に付けましょう。 そのように考えて、「味噌汁・ご飯」授業の国語編と算数編を提起した。

緊急事態なのだ。多くの先生たちが崖から転げ落ちているのである。 どのように着地するか、それを共に考えようとすることなのである。

2017年10月3日(火)